

化されて生じたものなのである。

元々は一つであったものの一方を他者として外側に押し出す作業は、現実の二重化である。「文学のおとぎ話」は、乖離した現在と過去、自然と文明、大人と子どもを接合し、二重構造を保ったまま一元化した世界を再構築したのである。そのため、「文学のおとぎ話」は、社会にたいする倫理的・政治的批判を提起したり、社会・宗教的な代償となったりするような世俗宗教的機能を持ったのである。実は、そうした機能自体は、中世以前の妖精信仰が担っていた宗教的な機能にはかならない。「文学のおとぎ話」には、物語の主要な登場人物としてしばしば妖精が登場するが、妖精たちが物語化される以前の、妖精の存在それ自体が持っていた宗教性は失われてしまっているといえる。しかしながら、中世以前の妖精信仰もっていた宗教的機能そのものは、「文学のおとぎ話」という物語の形式全体の中で保たれているといえることができる。

ブルターニュにおける図像と宗教性

—— 現代的展開事例から ——

中 島 和 歌 子

現代ブルターニュでは、フランスの他地域と異なる民族的・言語的な起源をケルトに有する象徴として、古代から中世にかけてケルト文化圏で装飾等に使用されたトリスケル (Treskel) と呼ばれる螺旋状図像が、観光をはじめとする文化的シ

ーンにおいて広く普及している。トリスケルは三つ巴様の形状をとる三つの渦巻からなり、各渦巻が「生・死・再生」に対応しているとの解釈が一般的である。美術史学においては、福音書写本などの使用例から、古代ケルト人の死生観や輪廻思想との関連可能性が指摘されてきた。

しかしながら、ブルターニュにおけるトリスケル受容は、二十世紀初頭にブルターニュ民族党 (Parti National Breton) の指導者 O・モルドレル (Olier Mordrel) が、「ケルト的な古い不思議なシンボルの中から党の徽章を選択する」方針を採ったことに始点をもつ。他のケルト文化圏と異なり、ブルターニュではトリスケルをあしらった出土品や文化財は見当たらず、今日ブルターニュで我々が目にするトリスケルは所謂「創られた伝統」に類するものと考えられる。なお、ブルターニュ民族党には、古代ケルト宗教の復興という文脈は存在しなかったが、古代の宗教的素材と推測されるトリスケルを再構成した表象を恃む戦略は、同時代ドイツの民族主義 (フェルキッシュ) 宗教運動と類似の発想であり、ここに多少の新異教主義的意識を確認することが可能である。

とはいえ、二十世紀初頭のブルターニュで異教性を強く追求する動きも皆無ではなく、ネオ・ドルイディズムの集団クレードン・ゲルティエック (Kredenn Geltaek ケルト信仰) は、ケルト神学や儀礼の確立、制定等を活動の目的としており、設立時の声明では反キリスト教の立場を明確に表明するなど、ペイガニズム的性質は非常に濃厚であった。なお、現代のドルイディズム集団のうち、クレードン・ゲルティエックの系統に属

第12部会

し、一九八〇年代以降に設立された団体は、ウェールズ発祥の図像トリバンではなくトリスケルをシンボルとして重視する傾向が強い。また、今日トリスケルは、ケルト的要素をルーツにもつとされる地域の多くで「生・死・再生」と理解されているが、ブルターニュでは例外的に、ドルイディズムの四元素に対応した「火・水・土（空気）」説が優勢である。この新たな解釈は、図像に託された意味が図像自身の意味へ変容した結果とみなすことができる。

クレーデン・ゲルティエックの指導者M・マルシャルとモルドレルには、共に雑誌『永遠なるブルターニャ』(Breiz Atao)の創刊に関わる等の接点を確認できるため、両者の活動が融合し、ドイツのように民族主義宗教運動となる可能性もあったといえるが、カトリックに対する立場の相違により、高次の連携現象は生じていない。だが、他地域との境界化をはかるため、自らのイデオロギーが程度の差こそあれ可視化したものとしてトリスケルを受容、使用している点は、両者に共通のものである。

トリスケルに関する先行研究の課題は、古い図像がより後代で、そして、発生した地域とはときに異なる地域で受容される事例、その際の契機や思想的戦略に踏み込めていない点にあった。ここでは「ブルターニュのトリスケル」という現代的展開事例の検討を通じ、図像、そして図像と関連する諸要素の宗教性について、宗教学の観点から考察する方法を探るとともに、図像の意味と図像に託された意味の相互補完的循環関係に着目してきた。

なお、トリスケルはブルターニュの独自性を主張する「見せる」図像のみならず、古代ケルト起源をもつ地の果て (Finis-terra) であるエキゾティシズムといった、集団外から要請されるブルターニュ観に対応可能な「見られる」図像でもある。こうした要素も含め、トリスケルを巡る諸展開と宗教性との関連を継続的に精査することが必要と考えられよう。

柳宗悦の自然観

本 多 亮

柳宗悦は民芸運動の創始者として有名だが、本来は宗教哲学者である。その哲学的営為は生涯止むことなく続けられた。柳の思想的な背景は、キリスト教の神秘思想、エマソンの超越主義、ブレークの世界観、鈴木大拙や西田哲学等いくつかある。全体的に見ると神秘主義的傾向が強い。そんな柳の思想を合理主義の時代に理解するのは難しい。そこで、本発表では扱う範囲をごく狭く限定し、柳の民芸論で用いられる「自然」という言葉を考察することにより柳哲学解明への一歩としたい。

柳の最初の民芸論は、三十七歳のときに新聞に掲載した「下手ものゝ美」(大正十五年)である。後に加筆訂正して「雑器の美」と題を改めた。この「雑器の美」は、これ以後に書かれた民芸論に比べて荒削りの感があるが、民芸の美に関する柳の基本的主張はほぼ網羅されている。そこで、この「雑器の美」